

## 文字・表記 (理論・現代)

一

文字・表記とはいっても、話題が集中するのは、やはり漢字である。特に、佐藤喜代治編『漢字講座』(明治書院、全12巻の発刊は、漢字という視点からの、日本語総点検のスタートとして注目を集めた。「1、漢字とは」「2、漢字研究の歩み」「3、漢字と日本語」「4、漢字と仮名」「5、古代の漢字とことば」「6、中世の漢字」「7、近世の漢字とことば」「8、近代日本語と漢字」「9、近代文学と漢字」「10、現代生活と漢字」「11、漢字と国語問題」「12、漢字教育」を内容とし、このうち、「3、漢字と日本語」が、昭和六十二年一月に、初回配本として刊行された。

一方、漢字文化の性格と、その将来性を、世界の言語文化の中に位置づけて論じた、橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇『漢字民族の決断——漢字の未来に向けて』(大修館書店、昭61・3)は、討論と講演を収録したもので、内容は、漢字復権運動の提唱である。第一部「日本語と漢字——十時間徹底鼎談」は、「一、文字と言語の問題について」「二、ゆたかな日本語の源泉……漢字・漢語」「七、日本語に入った漢字」「十、漢字の未来に向けて」といった、文字や漢字をめぐるも

田中章夫

ののほか「コバンを捨てよコバンガメ——西欧文明に立ちほだかった最初の国、日本」のような文化類型をめぐる問題も、とりあげられている。

近代ヨーロッパの言語観にしばられずに、漢字文化圏独自の言語観を確立し、漢字を基底にもつ、発想や思惟が、西欧とは別な文化を發展させ得ることを認識しようという主張である。第二部「漢字文化の歴史と将来」は、昭和六一年五月に東京で開催された、国際漢字シンポジウムの講演を収録したもの。三人の編者のほか、李栄、周有光、姜信沅、グエン・タイ・カン、川本邦衛らが、中国・韓国・ベトナムにおける漢字政策や漢字教育の問題を論じている。

日本の漢字問題については、大久保忠利『漢字と教育——漢字教育はどうあるべきか』(一光社、昭61・9)がある。「第一部、国民と国字」「第二部、漢字教育と六〇〇字私案」「第三部、漢字教育諸論とその学問的検討」「第四部、文部省漢字教育観批判」の四部からなる。当用漢字施行後の、常用漢字にいたる漢字政策に対する批判の立場から、独自の国字論を展開し、漢字教育への提言を試みたもの。巻末に「戦後・国語国字問題の歩み——国語審議会を中心に」を付す。

林四郎『漢字・語彙・文章の研究へ』(明治書院、昭62・2)は、論文集で、漢字関係のものは、「第一部、漢字研究への道」に収録され

ている。「漢字研究の一視点」「漢字基底語考」「漢字を評価するための観点」「日本語の漢字」「二字漢語各字の勢力と意味論上の問題」「単語の語構成意識と漢字義の独立性」「漢字用法辞典の記述法」の七編からなる。

同じく、論文集に、森岡健二「文字の機能」(明治書院、昭62・11)があり、内容は「I、漢字の機能」と「II、五十音図の問題点」の二部門に分れる。前者は「1、漢字の機能」「2、文字形態素論」「3、漢字の層別」「4、日本語と漢字」「5、基礎漢字を考える」「6、明治期における漢字の役割」「7、言語と文字」の七章からなり、巻末に、日向敏彦による解説「文字形態素論の成立と展開」がついている。

白川静「文字逍遙」(平凡社、昭62・4)は、「第一章・文字逍遙」「第二章・鳥の民族学」「第三章・漢字古訓抄」「第四章・漢字の諸問題」に分かれ、漢字をめぐる、さまざまな話題がとりあげられている。巻末には、「字形資料表」がある。

昭和六一年一月に、朝日出版社から刊行された、藤井友子「漢字音」は、日常的な一三〇語の漢語について、ハンダール・中国語・ベトナム語での発音を対照し、あとに、漢字圏それぞれの言語における漢字の生態を記している。

また、『朝倉日本語新講座』の「1、文字・表記と語構成」が、昭和六二年一二月に刊行された。「序説(水谷静夫)」「機械辞書の在り方と活用法(田嶋一夫・佐竹秀雄)」「表記論を背景とした語構成(佐竹秀雄・野村雅昭・石井正彦)」「日本語ワードプロセッサへの提言」(樺島忠志の各論からなり、いずれも、現代の漢字の問題がとりあげられている。巻末に「難読漢字表」「同字異訓熟語集」などの資料がつ

いている。

漢字についての、雑誌の特集では、昭和六一年六月号の『日本語学』(明治書院)に「特集・漢字」が、また、同年一二月の『翻訳の世界』(日本翻訳家養成センター)に「特集・日本語の中の漢字」があった。前者には、野村雅昭「国際化時代と漢字」、斎賀秀夫「現代人の漢字感覚」、岩淵匡「文字生活史における漢字」、神部尚武「漢字仮名まじり文の読みの過程」などがみられる。後者には、鈴木孝夫・柳文章の対談のほか、藤井貞和・本間一夫らの漢字論が掲載されている。

## 二

漢字をめぐる論文に目を転じると、漢字の機能を論じたものに、海保博之「人間における漢字情報処理」(『計量国語学と日本語処理』秋山書店、昭62・3、以下「水谷論集」と記す)、荒川清秀「字音形態素の意味と造語力——同訓異字の漢字を中心に」(『愛知大学文学論叢』82・83、昭61・11)があり、前者は、漢字の字形情報・音韻情報・意味情報の特性を、情報理論の面から分析し、「漢字を、みて・よんで・わかる」過程や、漢字の「読みやすくて書きにくい」性質などを明らかにしようとしたもの。後者は、「暑・温・暖」「古・旧」「中・内」による熟語を調べ、訓のみでなく、音にも、音独特の意味・造語性があることを説いたものである。

吉村弓子「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」(『日本語学』、昭62・8)は、造語をこえる漢字の機能を論じている。

漢字調査・基本漢字の関係では、佐竹秀雄「漢字・平仮名・片仮名の比率の関係」(『水谷論集』)、加藤彰彦「日本語教育における基本

語と漢字」(松村明教授古稀記念国語研究論集)明治書院、昭61・10、以下「松村論集」と記す)のほか、用字統計の整理を試みたものとして、野村雅昭、小橋史彦「国語用字の統計に関する調査」(日本電信電話公社電気通信研究所、昭61・3)などがある。

漢字の習得に関するものとしては、島村直己「児童の漢字使用」

(「国立国語研究所研究報告集」8、昭62・3)、「小学校配当漢字外常用漢字の読み」(「同研究報告集」7、昭62・3)のほか、国立国語研究所言語教育研究部「漢字の習得度調査・中間報告3」(特定研究「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」昭61・7)がある。かわつたところでは、徳田克己「弱視児における漢字読み書きの誤りと漢字属性の関係」(「計量国語学」昭62・9)があげられる。

漢字情報処理・ワードプロセッサ関係では、田嶋一夫「漢字字体シソーラスの開発と漢字における標準字体の問題」(特定研究「情報化社会における言語の標準化」中間報告、昭61・3)、斎藤秀紀「同形異語判別への仮名漢字変換処理の応用」(「国立国語研究所研究報告集」7、昭61・3)、荻野綱男「カナ漢字変換システムの能力の調べ方」(「計量国語学」昭61・7)、野村雅昭「情報化時代の文字生活」(「言語」一九八六年七月)などがある。

近代の用字については、国立国語研究所が中心になって進めてきた「国定読本第一期・尋常小学読本の用語」の調査の「科研費報告書」(昭61・3)に、見坊豪紀「特色ある用語・表記」、高梨信博「漢字用法一覽表」が収められている。

佐藤亨「外国語受容の歴史と展開—表記を中心に」(「新潟大学国文学会誌29」昭61・3)、佐伯哲夫「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」(「神戸大國語年誌」5、昭61・10)、同「官板バタバヤ新聞にお

ける外国地名表記」(「関西大学文学論集」昭61・11)は、いずれも、明治初期における外来語・外国地名の表記や用字法のゆれと、その定着の様子を扱ったものである。

また、原口裕「新訳伊蘇保物語の仮名遣と漢字使用」(「静岡女子大学国文研究」19、昭61・3)は、「新訳伊蘇保物語」の表記の調査から、上田万年の、仮名遣いや用字法に対する意識が論じられている。

作家の用字をとりあげたものに、京極興一「漱石の振り仮名」(「刊然の読み方をめぐって」(「松村論集」)、竹浪聡「島崎藤村「破戒」の漢字連続の読み方—その一斑」(「山梨英和短大日本文学論集」昭61・12)、新裕美「三島由紀夫に於ける和訓ルビ付の漢語—戯曲を中心として」(「日本語学」昭61・5)、下河部行輝「新感覺派の漢語—川端康成と横光利一」(「岡山大学文学部紀要」7)などが見られるが、各作家の独特な用字法の中に、表記意識の時代相がうかがわれて興味深い。新裕美の論では、三島の和訓ルビに、泉鏡花・北原白秋の影響を認めている。

田中章夫「近代の表記における漢字依存度の変遷」(「水谷論集」)は、明治から昭和にいたる、漢字使用度の漸減傾向が、ルビ付印刷の盛衰と密接な関係にあることを論じたもの。

以上のほか、天沼寧「擬音語擬態語の漢字表記」(「大妻女子大学文学部紀要」18、昭61・3)、松原純一「不変化語尾をもつ語の送り仮名について」(「松村論集」)があり、前者は、尾崎紅葉・二葉亭四迷・永井荷風の作品に現われる擬音語・擬態語を集録したもので、多彩な用字法に、オノマトペと結びついた、独特な漢字意識がみられる。後者は、「暮す／暮らす」「当る／当たる」などの送り仮名の様子を、現在の辞書類について調べたもので、「送り仮名の付け方」の問題点を浮び上らせている。

かな文字・かなづかいの方面では、天野清「子どもかな文字の習得過程」(秋山書店)が、昭和六一年二月に刊行された。著者の長年にわたる研究をまとめたもので、「序論・児童における文字言語行為の発生と文字教育の諸問題」「第一部・就学前児における語の音節構造の分析行為の発達とかな文字の読みの習得過程」「第二部・就学前児のかな文字の習得と発達」「第三部・語の音節構造の分析行為の形成を基礎とした「かな文字教育プログラム」と、4歳児、発達遅滞児を対象とした形成実験」「第四部・特殊音節についての自覚の発達と教育」「第五部・知見の要約と結論」から成る。しおみ・としゆき「幼児の文字教育」(大月書店国民文庫、昭61・6)も、就学前の幼児の文字教育と、そのベースとなる、幼児に対することばの教育のうえでの問題点をとりあげている。

論文には、佐藤栄作「現代かなもじ小考——ひらがなの変形」(「山手国文論叢」8、昭62・3)、鈴置浩一「仮名表記の問題」(「淑徳国文」27、昭61・1)などがあり、前者は、ひらがなの、いわゆる丸文字(少女文字)をとりあげて、変形の主因を、横書きの一般化に求め、その変形のプロセスに、書き易さから書風としての美意識に基づくものへという、二つの段階が認められるとする。後者は、「歴史仮名遣ひ」と「現代仮名遣ひ」の、双方の支持者の主張を検討し、仮名表記のあり方をふまえた、柔軟な実りのある論争が期待されるとする論である。

同じく仮名づかいについては、大木正義「現代かなづかいと教科書——オ列長音の記述を中心に」(「解釈」昭61・2)が、教科書における仮

名づかいの乱れについている。

昭和六一年一月に、雑誌「短歌研究」が、「現代短歌とかな遣い」を特集し、田中順二「短歌作品にみる仮名遣いの問題点」などを掲載している。

また、築島裕「歴史的仮名遣い——その成立と特徴」が、昭和六一年七月に、中央公論社から刊行されているが、これは、現代かなづかいの本質を知るためには、歴史的仮名遣いの理解が欠かせないという観点から著わされたものという。

外来語・外国語音の表記については、佐竹秀雄「外来語表記の問題点」(「宮地論集」)、浜光世「英語音の仮名表記の原理」(「福井大國語国文学」昭62・3)などが見られた。前者は、外来語における、発音のゆれと表記のゆれの調査に基づいて、外来語表記法のあり方を考察したものである。後者は、英語の発音を片仮名で表記することの意義を認めようえて、整合性のある原理を提案したものである。

#### 四

雑誌「日本語学」が、昭和六二年八月号で、「文字論」を特集し、大塚明郎・柴田武・志村和久・西田龍雄・野元菊雄・山田勝美が、「わたしの文字論」を展開し、鈴木修次も「文字論をめぐって」を寄せている。論考としては、杉本つとむ「文字史の構想と理念」、山田尚勇「文字体系と思考形態」、海保博之「日本語の表記行動の認知心理学的分析」、小泉保「正書法の理論と実際」、山口光「表意文字と表音文字」、手塚晃「言語・思考の枠組としての文字システムの評価」のほか、さきに紹介した、吉村弓子「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」を掲載している。

いわゆる丸文字・少女文字・マンガ文字をめぐる、山根一真「変体少女文字の研究——文字の向うに少女が見える」が、昭和六一年二月に、講談社から刊行されたほか、木村恭造「丸文字の問題」(『表現研究』44、昭61・9)、富田富貴雄「マンガ字考(中)」(岡山大学教育学部研究集録』71、昭61・1)などの論考が見られた。『変体少女文字の研究』は、入念な聞きとり調査と実態調査に基づいて、丸字・丸文字・マンガ字・ブリッコ文字・猫字などと呼ばれるこの種の文字が、全国各地で、ほぼ同じ字形で発生・伝播していることを明らかにしている。その発生と流行の要因として、横書き・筆記用具(ファンシー・シャープペンシル)・かわいさの表現意識などをあげ、字形の変形の社会的背景を考察した点が注目される。

ローマ字では、橋田広国編著『日本のローマ字運動の歴史・一八六八〜一九八五』が、昭和六一年七月に、日本ローマ字教育研究会から刊行されている。内容は、一八八六年(慶應4)三月の「和英通韻以呂波便覧」から一九八五年(昭和60)十一月の鳴海要吉(Shino Ota)の復刊版までのローマ字関係の刊行物・話題をとりあげた年表と、ローマ字運動史の解説で、巻末に、ローマ字団体の紹介・索引がついている。

神田和幸『指文字の研究』(光生館、昭61・5)は、外来語の表記にカタカナを使うように、手話に外国語などをとり入れる時に用いる指文字のシステムを研究したものの。

ちよつとかわつた論考に、山下浩「A君O君H君——言葉は猫である」校訂序説(『筑波大学文化論集』19、昭61・7)がある。これは、『ホトトギス』誌上に発表された「吾輩は猫である」の本文と、のちの諸版の本文との校訂作業で、版によって、「H君」が「A君」に誤って

いたり、「逆」が、「遂」になっていたりする、字形の類似による誤植がみられることを指摘したもので、文字論の側からみても興味深い。佐竹秀雄「誤りやすい用字」(『国文学』昭61・11)は、漢字・かなづかい・送り仮名などの正誤を、文字レベル・語レベルについて、手ざわよくまとめている。

つぎに、句読点・補助記号の関係では、雑誌「アステ」が、昭和六一年一月に、「句読点」の特集をしている。飛田良文「句読法の歴史——明治期を中心に」、野村雅昭「国定読本の句読法」、中村明「句読点の表現効果」などが見られる。

大類雅敏「句読点の効果」(『解釈』昭61・5)は、文章を書くうえの技法としての、句読点の効果について述べたもの。また、土屋信一「句読法のルール」(『国文学』昭61・11)は、「助詞」との前の読点「読点の位置に使われる句点」「読点の羅列」などをとりあげ、「句読点の付け方はまだ流動的である」とする。

明治二〇年に刊行され、その八年後に増補改正版の出版をみた、句読法の名著、権田直助の『国文句読考』が、大類雅敏の訳注編により、『現代語訳・権田直助著『国文句読法』』として、昭和六一年七月に、栄光出版社から刊行された。

ほかに、岡崎晃一「トロッコの補助記号」(『解釈』昭61・6)、亀井秀雄「記号と引用のレトリック」(『国文学』昭61・1)などがある。亀井の論は、「——(ダッシュ)」や「……(リーダー)」の類の使用を、明治十年代後半からと推定し、この種の記号類による引用の表現意識の確立を説いたもの。

Elisabeth Waltherの『一般記号論——パース理論の展開と応用』が、向井周太郎・菊池武弘・脇坂豊の訳により、昭和六二年一月に勁草

書房から出版された。記号論の基礎的な枠組が、手ぎわよく示されている。

昭和六二年三月に、あかね書房から刊行された『記号の図鑑1』ことばの記号』は、子ども向けのものではあるが、美しい色刷りで、絵文字・漢字・かな・ローマ字・手話・点字・モールス記号・手旗信号などが広くとりあげられていて、見ごたえのある労作である。

また、昭和六〇年一二月に、三省堂から出版された、江川清・平田嘉男編『記号の事典』のセレクト版が、昭和六二年九月に、同じく三省堂から刊行されている。

なお、字典や用字集の類は、すべて割愛したが、江守賢治『解説・字体辞典』(三省堂、昭61・11)は、収録した文字のすべてについて、字体の説明をつけたもので、字体・書体についての研究書として紹介しておく。

—— 学習院大学教授 ——